

# 九州天皇家論 3章 神武東征

## 九州天皇家の誕生

# 第二次神武東征

## 東征の出発地「吉備」

神武の東征路は二つに分けて考えなければならない。ポイントは「吉備」である。ここが東征の出発地である。

### <古事記が示す東征ルート>

- 第一次：日向ー豊国・宇佐ー筑紫(岡田宮・1年)ー阿岐國(多祁理宮・7年)ー吉備(高島宮・8年)  
第二次：吉備高島宮ー速吸門ー浪速の渡りー青雲白肩津(会戦)ー南方ー血沼の海ー紀國・男之水門ー熊野村ー吉野川河尻ー宇陀穿ー宇陀ー忍坂大室……畝火の白檮原宮

### <日本書紀が示す東征ルート>

- 第一次：日向國ー速吸之門ー筑紫國・菟狹ー筑紫國・岡水門ー安藝國(埃宮)ー吉備(高嶋宮・3年)  
第二次：吉備高嶋宮ー難波崎(浪速國)ー河内國・草香邑・青雲白肩津ー孔舎衛坂会戦ー草香津ー茅渟の山城水門ー名草邑ー熊野・神邑ー熊野・荒坂津ー菟田・穿邑ー吉野……畝傍山

記紀ともに「吉備國」までの行路はそれほど異なるわけではない。「吉備」までは戦闘はない。

阿岐國の多祁理宮に7年坐しき。亦其の國より上り幸でまして、吉備の高島宮に8年坐しき。(古事記)

この「吉備」は古代「吉備」で近世の岡山吉備ではない。神武の名前は「磐余彦」という。「磐余(イワレ)」とは彦島小戸の地名である。

磐余彦のイワレとは小戸の地名である。紀・神武は「それ磐余の地、旧名は片居、または片立という。わが皇師が虜[テキ]を破るにいたり、大軍集まり、その地に満[イワ]めり。よって号を改め、磐余となす」と記す。これも穴戸伝承から。  
(古田史学の会・西井氏)

神武は小戸で兵を徴集し、兵は「この地に満ちた(イワメ)りた」と伝える。よって、神武は「磐余(いわれひこ)」という名を名乗ったというのである。一種の地名説話であるが、「磐余(イワレ)」とは、もともと、彦島小戸の地名であったと思える。彦島小戸は確かに、岩割れして生まれた小戸である。

記紀とも神武が造船し徴兵したのは「吉備」であることを伝える。「吉備」で徴兵し多くの兵が集まった。「天(あま)王朝」の「吉備」は彦島に存在した。では、何故、この地に向かったのか。「吉備」には神武の妻の実家があったからである。妻の実家に戻った目的は造船であった。最初の東征で「筑紫・岡田宮(門司)」、「阿岐國・多祁理宮(門司大積)」に滞在したのは政治目的であった。この行程は東征と云うべきではない。この行程には戦闘はない。政治的な目的(統治)であった。

しかし、「阿岐國」から「吉備(彦島)」に渡った神武は明確な目的を持っていた。「阿岐國」に滞在した間に神武は新たな決意を固めていた。それが東征であった。神武は他国への軍事的侵略をはっきりと意識していた。その為には神武は「吉備」に渡ったのである。東征には船が必要である。神武には造船の技術はない。その技術を持っているのは妻の実家である。「吉備」の妻の実家はその造船技術を持った海部だった。こうして、神武は「阿岐(安藝)」から「吉備」に向かったのである。「吉備」で造船し、徴兵した。黥面文身(いれずみ)をした多数の兵が集まった。神武は船を得て、兵を得て、彦島、吉備から「東征」に出発したのである。

## 「吉備」は彦島西山町

神武は妻の故郷「吉備」に渡った。この「吉備」は、古代「吉備」である。「吉備」は「州生み」の時に登場する「吉備児島」と同じ「吉備」である。「吉備」の宮の名は「高島宮」と云った。日本書紀は「高嶋宮」を「行館(かりみや)」だ、と説明している。この宮は妻の実家に身を寄せていたから、「本宮」ではなかったのである。神武はここに八年(四年)居て、第二次東征に向かった。

## 「難波崎」は若松区高塔山

日本書紀も古事記も「阿岐(安藝)」から「吉備」へと進んでいる。通常、この行路は広島・安芸一岡山・吉備と比定されている。現在に残る地名から推定すればこのように思える。しかし、「吉備」は古代「吉備」である。古代「吉備」は岡山・吉備ではなく、彦島西山町・吉備であった。

戊午年の春二月十一日、皇師遂に東へゆく。舳艫相接げり。方(まさ)に難波碕に到るときに、弁き潮有りて太だ急きに曾ひぬ。因りて、名づけて浪速國とす。亦浪花と曰ふ。今、難波と謂うは訛れるなり。  
(日本書紀・神武)

神武一行は古代「吉備(彦島西山町)」から出航した。船で関門海峡を南下し、「難波崎」を通過した。その時、潮があまりにも速く流れていたのも、「浪速」と云った。これが後に「難波」と訛った。「難波崎」は仁徳天皇の歌にも登場する。関門海峡の岬である。

「淡路島を見むと欲ふ」とのりたまひて幸行でましし時淡路島に坐して、遙に望けて歌曰ひたまひしく  
おしてるや 難波の崎よ 出で立ちて 我が国見れば 淡島 自凝(おのころ)島  
あじまさの 島も見ゆ 放つ島見ゆ  
とうたいたまひき

「難波の崎」とは関門海峡に面した「若松区高塔山」である。

## 「速吸門」・「曲浦」は彦島小戸

古事記と日本書紀の東征路は大きく異なるように見えるが、共通の「速吸門」を先に検討しよう。古事記の行路は「吉備」―「速吸門」―「浪速の渡」―「白肩津」である。「吉備」を出た神武一行が通過したのが「速吸門」である。この「速吸門」は日本書紀の記述から、確定が容易である。

速吸之門に至ります。時に、一人の漁人有りて、艇に乗りて至れり。天皇、招せて、因りて問ひて曰はく、「汝は誰そ」とのたまふ。対(こた)へて曰さく、「臣(やつかれ)は是國神なり。名をば珍彦(うずひこ)と曰す。曲浦(わだのうら)に釣魚す。天神の子来でますと聞りて、故(こと)に即ち迎え奉る。  
(日本書紀・神武紀)

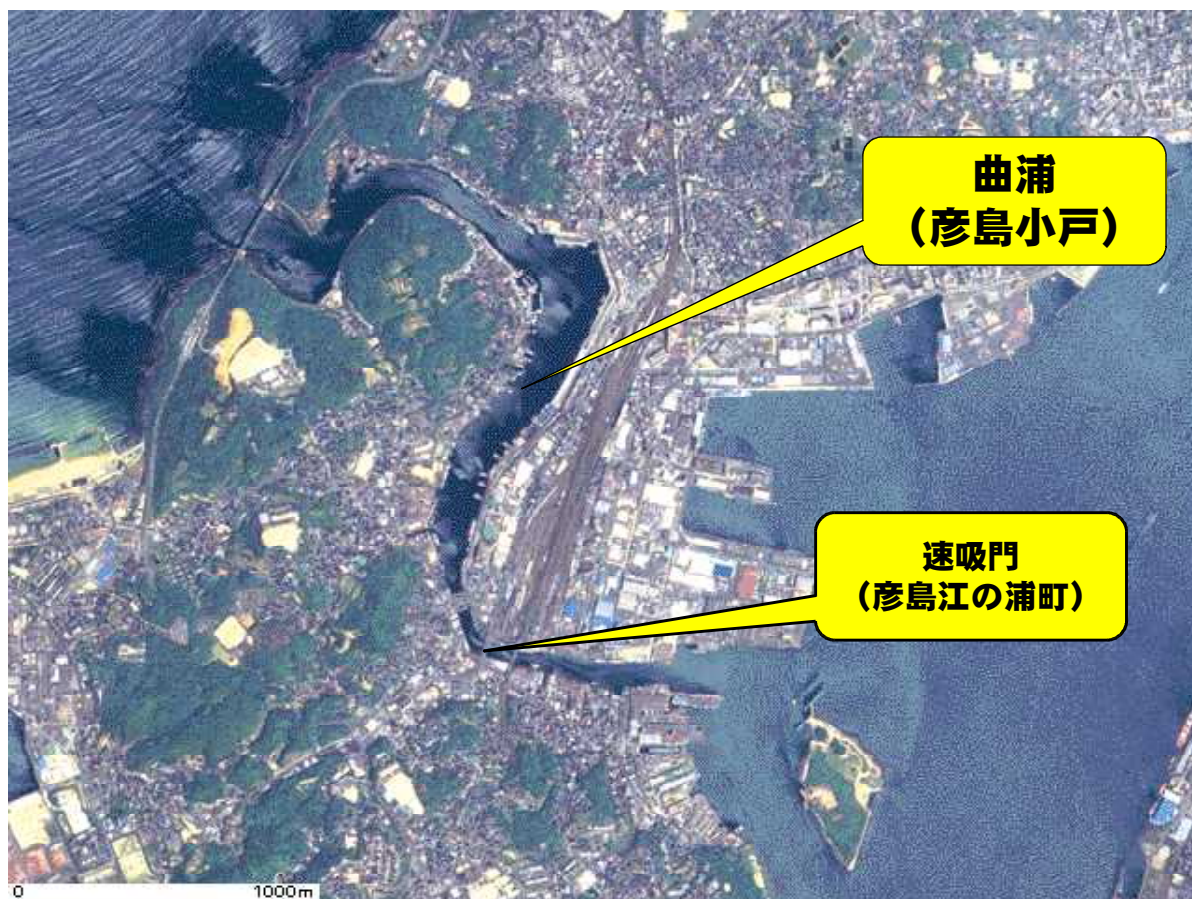
「速吸門」は、潮の流れが速く、吸い込むまれるような瀬戸であることに由来する名前であろう。神武はここで一人の人物と出会う。彼は自らを「珍彦」と名乗り、「曲浦」で漁をしていると言う。この「曲浦」という珍しい地名がその場所を特定する。

このピンポイント特定の功績は西井健一郎氏(古田史学の会員)である。西井氏の見解では、親指とひとさし

指で形づくる直角を「曲」という。大工道具「曲尺」を「かねじゃく」「まがりかね」と呼ぶのと同じで、「曲」とは直角を表す。「曲浦」とは直角の浦の意である。直角の浦(曲浦)とは彦島小戸(小門)である。まさに直角に曲がる浦である。

この彦島・小戸は響灘と関門海峡の潮の差によって11ノットの速さで潮が流れていた。まさに「速吸門」と呼ぶにふさわしい。

「曲浦」とは彦島・小戸である。「速吸之門」と「曲浦」は共に彦島小戸の名前であった。「珍彦」の言葉は原初性を保っていたのである。近代比定では「速吸之門」を豊予海峡とする。その理由は「日向」を「宮崎県日向」と先に決めて、そこを定点として読んでいった結果である。だが、日本書紀が記録していた「曲浦」とは「直角に曲がる浦」をさし、その浦とは彦島小戸である。神武一行は古代「吉備」を出立して関門海峡を東北にすすみ、彦島小戸の入り口まで進んだのである。



古事記および日本書紀において神武東征行路の「速吸門(曲浦)」とは彦島・小戸である。古事記では神武は「吉備」から東に進んで「速吸門」に到る。よって「吉備」は「速吸門」の西に位置する。古代「吉備」は彦島・西山町である。

## 日本書紀の「速吸之門」

日本書紀の最初の行路は古事記と少し異なる。日本書紀では「速吸之門」を最初の旅の時に通過している。

日向國－速吸之門－筑紫國・菟狹－筑紫國・岡水門－安藝國(埃宮)－吉備(高嶋宮・3年)

日本書紀では神武は「日向」を出てすぐ「速吸門」に到る。「日向」は「高千穂宮」が存在した小倉北区である。「高千穂宮」を出た神武はそのまま「速吸門」まで進んでいる。この行路はむろん舟を使っている。神武は舟で巖流島の近くまで来て、そこで「珍彦」と出会う。この行路は小倉北区－巖流島で、位置関係に問題はない。その後、「筑紫國の菟狹」と「筑紫國岡水門」に立ち寄っている。この「筑紫國」は古代「筑紫國」で、門司港に存在した弥生国家である。「岡の水門(みなと)」も門司港である。この地の領主の歓待を受けて後、神武は「安藝

國」に進んでいる。この「安藝國」は門司大積である。日本書紀の神武は「日向」の宮を舟で出た。だが、この舟は小さな舟だったのであろう。そして門司港で上陸し、その後、「安藝國」へ、企救半島を徒歩で南下して、門司大積まで行った。

日本書紀の神武は最初から船を使っている。ところが、古事記では神武は小倉北区の「高千穂宮」から門司港までは陸路をとったと思われる。古事記では「阿岐(安藝)」までの進路において「速吸門」には立ち寄っていないからである。「日向(小倉北区)」の「高千穂宮」を出たのは記紀とも共通する。そして、「阿岐(安藝)」まで行ったことも共通する。このいわば政治的な東征は出発地も目的地も同じであるが、古事記は陸路、日本書紀は海路と異なる。どちらが史実か判断はできないが、「日向」は小倉北区、「速吸門」は彦島小戸、「阿岐(安藝)」は門司大積は共通する。そして、「阿岐(安藝)」から妻の実家、古代「吉備」、彦島に渡ったことも共通する。ここまですべてが軍事的東征に向かう準備段階であった。彦島「吉備」で東征準備を完了した神武はいよいよ東征に向かって出発した。



## 「青雲白肩津」への侵攻は「阿岐國」から

記紀とも東征行路は「吉備」を出発し、関門海峡を東北に進んでいる。日本書紀は関門海峡の潮の流れを「浪速」と記述している。古事記は「速吸門」「浪速の渡り」を記述している。どちらも関門海峡である。神武一行は「浪速の渡り(壇ノ浦)」まで来た。次が「白肩津」である。

### 古事記神武東征

第二次: 吉備高島宮—速吸門—浪速の渡り—青雲白肩津(会戦)—南方—血沼の海—紀国・男之水門(五瀬命没)—熊野村—吉野川河尻—宇陀穿—宇陀・忍坂大室……・畝火の白橿原宮

### 日本書紀神武東征

第二次: 吉備高島宮—難波崎(浪速國)—河内國・草香邑—青雲白肩津—孔舍衛坂会戦—草香津(白



是に登美毘古と戦ひたまひき時、五瀬命、御手に登美毘古が痛矢串を負ひたまひき。故爾に詔りたまひしく、「吾は日神の御子と為て、日に向ひて戦ふこと良からず。故、賤しき奴が痛手を負ひぬ。今者(いま)より行き廻りて、背(そびら)に日を負ひて撃たむ。」と期(ちぎ)りたまひて、南の方より廻り幸でましし時、血沼海に到りて、其の御手の血を洗ひたまひしく。故、血沼海と謂ふなり。

(古事記・中巻)

敗戦の原因を「日に向かって攻めた」ということに求めている。

而向日 征虜 (日に向かい あたをうつ)

「向日」の読みは「日に向かう」である。記紀で「向日」とは西を意味する。神武の宮は「日向の高千穂の宮」であったが、伊勢風土記では、この宮は「西の宮」と書かれている。「向日」とは西である。この神武(五瀬命)の言葉の「向日」も同じ使い方をしていると思われる。確かに、「日に向かう」とは西の方向と決まっているわけではない。当然、朝日と夕日とは異なる。朝日に向かう場合は東向きで、夕日に向かう場合は西向きである。自分の位置によって相対的となる。だが、神武は「向日」を「日向」と同じ意味で使っていると思われる。つまり、神武は「西にある太陽の方向に向かって攻めた故に敗れた」と敗戦を総括した。

ワレワレハ西ニ向ッテ敵ヲ攻メタ。ワレワレハ日神ノ子孫デアル。日ニ向カッテ攻メテハナラナイ。ワレワレガ敗レタ原因ハ日ニ向カッテ攻メタコトニアル。今カラ敵ノ背後(西)ニ廻リ、日神ヲ背負ッテ敵ヲ討トウ。ソウスレバ、ワレワレハカナラズ勝ツコトガデキル

今者(いま)より行き廻りて、背(そびら)に日を負ひて撃たむ。

この迂回作戦は「白肩津」から舟で再び川を下ることを意味する。そして敵の背後に廻り、太陽を背にして戦おうと提案した。神武一行が遡った川は南北に流れる川ではない。東西に流れる川である。「白肩津」があった川は東西に流れていた。川の流れは神武の時代と現在と変わることはない。従って「白肩津」が存在した川は現在も東西に流れている。「白肩津」を特定するには東西に流れる川を見つけなければならない。

## 日本書紀は「孔舎衛坂」で会戦

日本書紀では上陸地点は「白肩津」であるが、会戦場所は「孔舎衛坂」である。

三月の十日に、遡流而(かわよりさか)上りて、徑に河内國の草香邑の青雲の白肩之津に至ります。

夏四月の九日に、皇師兵を勒(ととの)へて、歩より龍田に趣く。而して其の路狭く峻しくして、人並み行くこと得ず。乃ち還りて更に東膽駒山を踰えて、中洲に入らむと欲す。時に長髓彦聞きて曰はく、「夫れ、天神の子等の来ます所以は、必ず我が國を奪はむとならむ」といひて、則ち盡に属へる兵を起こして、徼りて、孔舎衛坂にして、與に會ひ戦ふ。流矢有りて、五瀬命の肱脛に中つり。皇師進み戦ふこと能はず。天皇憂へたまひて、乃ち神策を冲衿に運めたまひて曰はく、「今我是日神の子孫にして、日に向いて虜を征つは、此天道(あめのみち)に逆(さか)れり。若(し)かじ、退(しりぞ)き還(かえ)りて弱きことを示して、神祇(あまつやしろくにつやしろ)を禮(いや)び祭(いは)いて、背(そびら)に日神の威(みいきほい)を負(お)ひたてまつりて、影(みかげ)の随(まにま)に壓(おそ)ひ躡(ふ)みなむには、此(かく)の如くせば、曾(かつ)て刃に血らずして、虜(あた)必ず自(おの)づら敗れなむ」とのたまふ。みな曰さく、「然なり」とまうす。是に、軍中に令して曰はく、「且は停れ。復な進きそ」とのたまふ。乃ち軍を引きて還りたまふ。虜亦敢へて攻めまつらず。却りて草香津に至りて、盾を植てて雄誥したまふ。因りて改めて其の津を号けて盾津と曰ふ。今蓼津と云へるは訛れるなり。

(日本書紀・神武紀)

日本書紀では神武一行は川を遡って「白肩津」に無事上陸している。「白肩津」があった場所は「河内國の草香邑」と明記している。日本書紀は、その後、徒歩で「龍田」に向かったが、その道があまりにも狭く、二人並んで歩くことができなかったため、引き返して、「東膽駒山」を越えて中洲に入ろうとしたと書いている。この時、長髓彦が兵を起こし、神武と長髓彦は「孔舎衛坂(くさへのさか)」で戦うこととなる。戦場は「白肩津」から山手に入った坂道である。

この戦いで、兄、五瀬命が矢を受け傷つく。そこで、神武は、「今我是日神の子孫にして、日に向いて虜を征

つは、此天道(あめのみち)に逆(さか)れり。」と考え、古事記と同じように、敵の背後に回り、太陽を背にして攻撃する作戦を立てる。そうして、「孔舎衛坂」から引き返した。引き返した場所は「草香津」である。「草香津」とは当然、「草香邑」の津である。日本書紀は「白肩津」については「河内國の草香邑の青雲の白肩之津」と書いている。「草香津」も「白肩津」もどちらも「草香邑」の港である。つまり、「草香邑」の港の名前を「白肩津」と書き、また「草香津」とも書いているのである。名前は異なるが、この二つの津は同じ津である。神武は「白肩津」に上陸して「孔舎衛坂」で戦ったが、敗れてまた「白肩津」まで引き返し舟で川を下ったのである。

## 「白肩津」は櫛毛川の湊

神武が遡り上陸した「白肩津」が存在した川はどの川か。

- (1) 神武が船で遡ったのは川である。「遡流而(かわよりさか)上りて」と書いているように、この川は海から遡る川である。そして、敗戦後、再び、この川を下った。
- (2) その川は急流ではない。神武の時代の手漕ぎの舟でさかのぼることができる緩やかな川である。
- (3) その川の河口は南にひらけた海である。
- (4) 南の海を進んで迂回すれば「白肩津」に陣どる敵の背後(西側)に廻ることができる。
- (5) 川は神武が滞在した「阿岐國(門司大積)」の南で東西に流れる川である。

以上の条件で、神武が遡った川を特定しよう。門司大積の南に東西に流れる川が存在するか。確かに存在する。その川とは「櫛毛川」である。「櫛毛川」は完全に東西に流れる。また、その流れは穏やかである。現在でも川舟が上下していて、舟が係留されている。南方はむろん海である。海を迂回して背後に廻ることも可能である。もう一つ東西に流れる川がある。竹馬川である。竹馬川もほぼ東西に流れているが、南は海ではない。「白肩津」があった川とは「櫛毛川」である。では、神武軍が上陸した「白肩津」とはどこか。「白肩」とは「白潟」の意味であろう。白い砂の津であったと考えられるが、現在そのような白砂の港はない。神武は川を遡り「白肩津」に上陸した。古事記ではそこを登美毘古に襲われた。「白肩津」とは櫛毛川の上流、櫛毛川と相割川が合流する地点で、西福寺がある付近の港であろう。





## 「南方」への脱出

神武は舟で「青雲」の支配する「白肩津」に上陸した。その時、「登美毘古」の急襲を、盾を立てて防ぎ、そのまま川を下り、「南方」へ脱出した。古事記は神武の脱出について次のように書いている。

故、其の國より上り行でましし時、浪速の渡りを経て、青雲の白肩津に泊てたまひき。此の時、登美能那賀須泥毘古、軍を興して待ち向へて戦ひき。爾に御船に入れたる楯を取りて下り立ちたまひき。故、其地(そこ)を號(なづ)けて「楯津」と云ふ。今者に日下の蓼津と云ふ。是に登美毘古と戦ひたまひき時、五瀬命、御手に登美毘古が痛矢串を負ひたまひき。故爾に詔りたまひしく、「吾は日神の御

子と為て、日に向ひて戦ふこと良からず。故、賤しき奴が痛手を負ひぬ。今者(いま)より行き廻りて、背(そびら)に日を負ひて撃たむ。」と期(ちぎ)りたまひて、南の方より廻り幸でましし時、血沼海に到りて、其の御手の血を洗ひたまひしく。故、血沼海と謂ふなり。(古事記・中巻)

神武の逃走路は、「南の方より廻り幸でましし」と、書かれている。「南の方」とは普通に「南の方向」であろう。特に「南の潟」と解釈する理由はない。神武は「白肩津」で敗れた。そして、遡ってきた川を下り、海に出た。その海を南の方向に進み迂回した。この読みが自然な読みである。この海とは周防灘である。



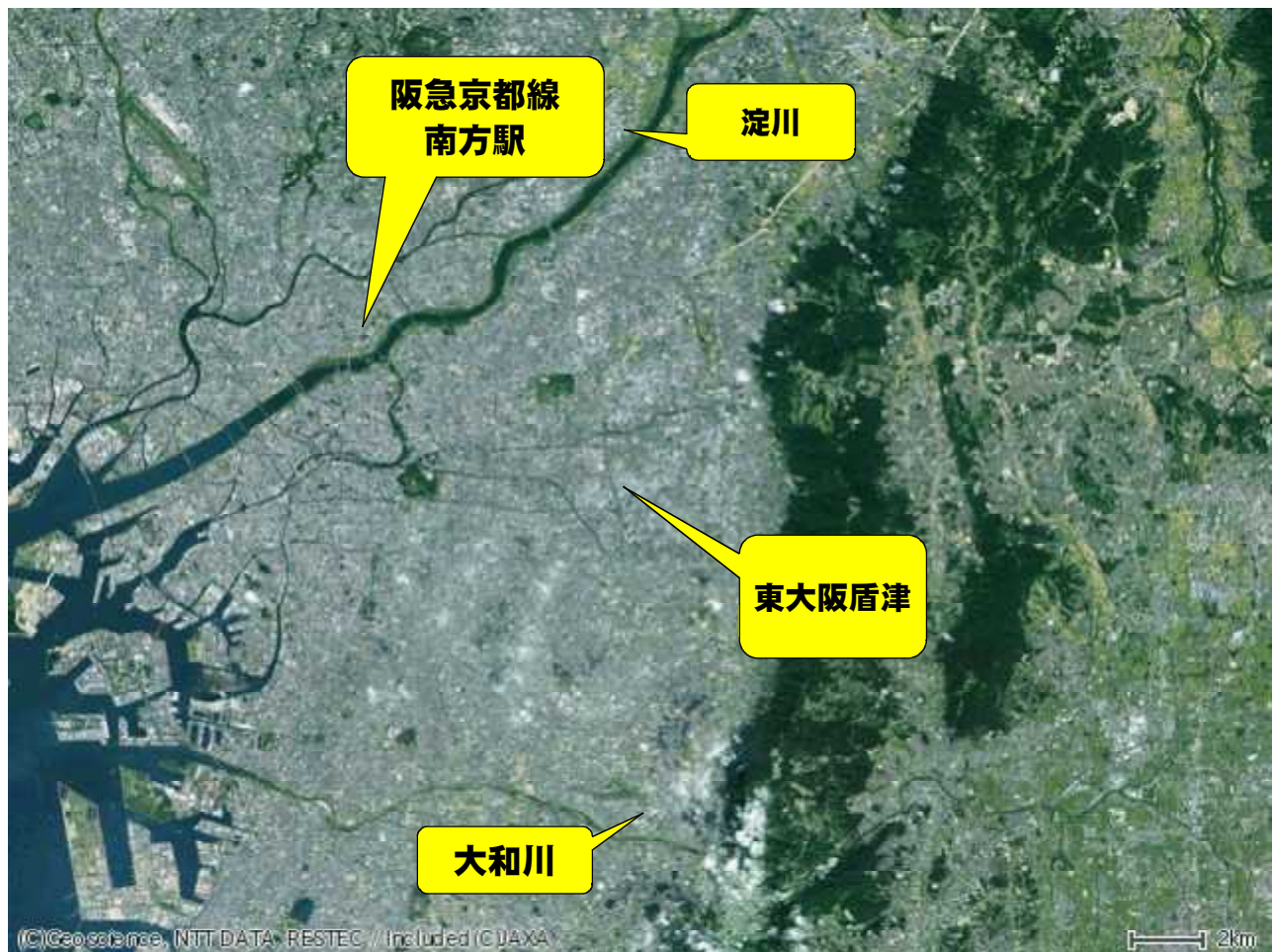
## 近代比定の東大阪「盾津」は誤謬

乃ち軍を引きて還りたまふ。虜亦敢へて攻めまつらず。却りて草香津に至りて、盾を植てて雄誥したまふ。因りて改めて其の津を号けて盾津と曰ふ。今蓼津と云へるは訛れるなり。(日本書紀・神武紀)

神武は「白肩津」に上陸した後、「孔舎衛坂」で長髓彦と対戦した。兄が矢傷を負い、一旦退却する。退却した津は「草香の津」であった。ここで神武は盾を立てて、雄叫びした。故に、この「草香津」を「盾津」と云うようになった。この「盾津」という地名が東大阪市に存在する。むろん、現在は津ではないが、神武東征の紀元前一世紀頃は河内湖の傍だったから、ここに津があったと考えることができる。故に、神武が上陸した「草香津」、後の名前「盾津」は東大阪の「盾津」に比定されている。ここまでは問題はないように見える。だが、当時の河内湖の時代においても、東大阪の「盾津」の南は陸で、海ではない。古事記は、神武は「草香の津(白肩津)」から南の方に迂回して、「血沼海」に出たと書いている

南の方より廻り幸でましし時、血沼海に到りて、其の御手の血を洗ひたまひしく。故、血沼海と謂ふなり。

この記述は「盾津」から「南の方」に出て、海に出たと読むほかない。だが、東大阪市「盾津」の南は陸で、海に出ることはできない。現在はもちろん、神武の当時も「盾津」から南の海に出ることはできない。本居宣長が悩んだと伝えられるのも当然であろう。



## 古田武彦氏の読み、「南方」は阪急電車の南方駅

ところが、古田武彦氏は「南方」を「南潟」と読み、見事、宣長を悩ました難問を解いたかのように見える。大阪と神戸を繋ぐ阪急電車に、「南方」という駅がある。南方駅は大阪市淀川区西中島にある。「南方」は古代「河内湖」の出入りに当たり、「南潟」と読みかえることはできる。古田氏は「南方」を「南の方向」という意でなく、「南潟」と解釈した。そして、神武はこの「南方(南潟)」から大阪湾を脱出したと読んだのである。

古田氏は神武東征は奈良という理解に立っている。その上で「南方脱出」問題を解こうとした。偶然とは云え、大阪市淀川区に「南方」という地名が存在した。結果、古田氏は一つの回答を見つけることができた。果たして古田氏の回答は妥当であろうか。「脱出」問題以前に、神武は当時の「河内湖」に侵入したのかどうかを解明しなければならない。

## 「記・紀」の描写は「川よりさかのぼりて」である。

神武紀では「遡流而上りて(川よりさかのぼりて)」と記述されている。神武が遡ったのは「川」である。「湖」ではない。東大阪「盾津」のあたりは、「河内湖」沿岸で、川の上流とはいえない。

下図は約4000～3000年前の「河内潟」である。(梶山・市原「大阪平野のおいたち」より作成・大阪市旭区市民センター)

2000年前の「古代河内湖」は広い湖である。もし、東大阪市「盾津」で会戦したというのが史実なら、神武は河内湖の奥深くまで進入したことになる。しかし、神武紀では、「遡流而上りて」と、描写しているように、海から川に入ったというのが、神武紀が述べるのが神武軍の行路である。

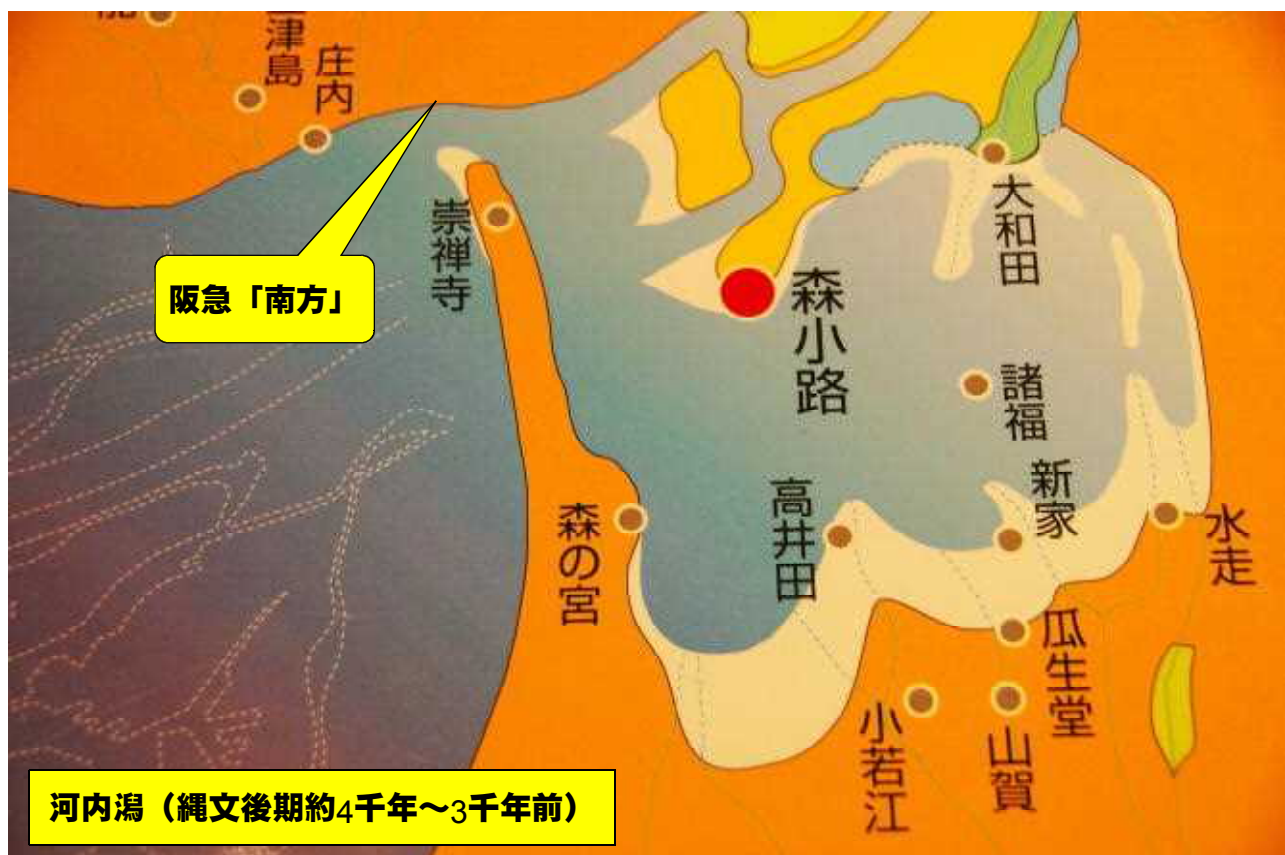
ここに、「湖」はない。だが、神武は「河内湖」を海と思ったと考えることもできるであろう。では、神武が遡った

川とはどの川であろうか。「河内湖」に注ぐ川は、淀川と大和川である。もし、奈良を目的地としていたなら、「河内湖」に侵入して、そのまま自然に淀川を遡るのが普通の道筋である。しかし、神武が遡ったのは淀川ではない。東大阪市「盾津」は「河内湖」の奥である。この「盾津」は「川を遡った」処にあるのではない。「河内湖」の岸边に「盾津」がある。神武が湖と川をまちがえたとは考えられない。また、大和川を遡上して、奈良に侵入を図ったとすれば、「盾津」に上陸する必要はない。「古代河内潟」の地図から考えて神武軍が東大阪「盾津」に上陸したとする想定は無理である。神武東征は奈良ではない。

「盾津」は神武が「盾を立てた」ことに由来する名前である。ところが、この「盾津」という地名に関して日本書紀は注を付け加えている。

因りて改めて其の津を号して盾津と曰ふ。今蓼津と云えるは訛れるなり

日本書紀編纂の八世紀では、「盾津」という名前は訛って「蓼津」という名前となっていた。つまり、神武東征から約800年ほど経った日本書紀編纂の時代にはすでに「盾津」の名は消えていたのである。八世紀の天皇家の史官は、現地の名は「盾津」ではなく「蓼津」だと云っているのである。もし、東大阪市にその地名が残るとしたら、「盾津」ではなく「蓼津」でなければならない。それが、現在、「盾津」という地名がそのまま残っているのは日本書紀の記述に反する。東大阪「盾津」は後付けの地名である。



## 万葉集(第一巻・第二巻)に「河内湖」は登場しない

仁徳の「高津宮」は大阪の「高津の宮」と考えられている。もし、仁徳の「高津の宮」が大阪であるならば、「河内湖」が度々古事記に登場して当然である。また、万葉集(第一巻・第二巻)にも歌われて当然である。しかし、この「河内湖」を歌ったものはない。

古代大阪において、「河内湖」は交通、漁業、農業など人々の生活にとって重要な役割を果たしていた。この湖の周りに文明が栄えたことは、「森小路遺跡」や「大和田遺跡」が物語る。「難波の海」と「河内湖」は生活上セットである。「難波」が歌われたのなら、「河内湖」も歌われていなければならない。仁徳天皇記にも「河内湖」の記述がなければならないであろう。しかし、ない。神武天皇家の人々は「河内湖」を知らなかったのである。神武東征は大阪とは無縁である。